Osaka Shoin Women's University Repository

の親王達に最高敬語「おはします」を用いる地の文との、対比的用

良暹法師について

安田純生

一

良暹の経歴については、延暦寺に所属する僧で、延暦寺の別院であった祇園（感神院）の別当をつとめ、晩年に洛北大原に籠居したらしいということ以外は、ほとんどが不明である。生没年も明確には決しがたい。斎藤熙子氏は、康平末年に六十七、八歳で没したとされたが、[1]稲賀敬二氏は、『袋草紙』上巻に、橘俊綱が播磨へ下向した際、良暹がつき従っていた記事が見える点から、その没年を治暦二年以後に引き下げる可能性を示された。[2]稲賀氏の説は、橘俊綱の播磨守在任期を、斎藤氏の俊綱に関する諸論[3]に依拠して、治暦二年―延久二年頃と推定された結果であるが、この推定には疑問がある。というのは、『水左記』康平七年六月十五日の条によれば、宇治平等院へ赴く源俊房らが「播州山庄臥見」に宿泊しているからである。この「播州山庄臥見」は、著名な橘俊綱の伏見亭と解するのが自然であるので、俊綱は、少なくとも康平七年には、すでに播磨守の任にあったと見られるのである。とすれば、康平末年没説と『袋草紙』の記載とが、かならずしも矛盾するものでないことになろう。

良暹は、播磨のほか摂津や越の国などにも旅をしたようであるが、あるいは筑紫にも下ったことがあるかもしれない。[4]越の国に旅行したことは、『後拾遺集』巻十九所収の慶範法師の歌によって知られる。

山にすみうかれて、こしの国にまかりくだりたりけるに、
思ひかけず良暹法師などあそびて、昔のこと思ひいでていひ侍りければよめる　慶範法師

思へどもいかにならひし道なれば知らぬさかひに惑ふなるらん

詞書に「昔のこと」とあるから、慶範と良暹とが叡山時代より親しく交際していたことが判明する。「いかにならひし道」につき、北村季吟は「歌の事なるべし」（『後拾遺集抄』）と注しているが、僧侶生活を暗示しているとも考えられよう。

Osaka Shoin Women's University Repository

両者の交友を語るものとしては、『金葉集』巻九にも

良暹法師をうらむることありける頃、むつき一日にまうできて、また久しうみえざりければ、いひつかはしける

律師慶範

春の来しその日つららはとけにしをまた何事にとどこほるらむ

という一首が見られるが、作者を「律師慶範」と表記するのは不審である。『後拾遺集』の慶範法師と『金葉集』の律師慶範とが同一人であることは、まず疑いはないが、『僧綱補任』を検する限り、良暹と同時代人で律師にまでのぼった慶範は存在しない。斎藤熙子氏は、康平四年五月一日に六十五歳で入滅した僧正慶範をあてておられるが、[5]そうであるならば、『金葉集』の作者表記はもちろん、『後拾遺集』でも「僧正慶範」でなければならないはずである。また、『金葉集』巻十所収の永成法師と律師慶範との連歌が、『俊頼髄脳』では、永成法師と慶範法師との連歌として載せられているが、源俊頼の記憶に何か混乱があるのであろうか。

いずれにせよ、勅撰歌人の慶範は、藤原安隆の男の僧正慶範ではなく、やはり、『勅撰作者部類』に「叡山法師、右京亮中原致行子」とあるのに従うべきであろう。このほか、『和歌色葉』や『二中歴』第十三「名人歴」、さらに『後拾遺集』の勘物などにより、慶範法師は、大外記中原致時の孫で、横川供奉と号した事実が知られる。[6]その妻は、伊勢大輔家に仕えて侍従尼と呼ばれていた。[7]加えて、『春記』長久二年三月二十八日の条に、殺人犯として捕縛された中原師範という人物が見えるが、「年廿九云々、故右京亮致行第二之子也」とあるので、この師範が慶範の兄弟であることが判明する。また、『小右記』万寿二年七月二十日の条に見える、次田為利と闘乱した慶範法師は同人であろうか。同人とするならば、致行の息子たちには、共通して粗暴な性格が認められるようである。

ともあれ慶範は、横川供奉と号したというのであるから、横川に住した僧であろう。そして、慶範と良暹とが古くから親交を結んでいたことを考慮すれば、良暹もまた、横川系の僧であった公算が大きいといわねばならない。

良暹の僧侶生活がうかがわれる歌に、次のような一首がある。

ひえの山の念仏にのぼりて、月をみてよめる

天つ風くもふきはらふ高嶺にて入るまでみつる秋の夜の月

（『詞花集』巻三・『後葉集』巻四）

これが、当時、叡山の三塔において修せられた不断念仏での詠歌であるのは、よく知られている。[8]不断念仏は、周知のごとく、八月十一日の暁より十七日の夜まで、つまり中秋の名月の前後にわたって行なわれた。したがって、良暹が月を詠み込んだのは、それなりの必然性が存するわけで、事実、秋の月を「入るまでみ」たのであろうが、治安三年八月に催された土御門殿歌会での藤原長家の歌、

天つ風くもふきはらふ常よりもさやけさまさる秋の夜の月

（『栄花物語』巻十九「御裳ぎ」）

と初句・第二句・結句が一致していることも注意される。良暹は、しばしば古歌を盗用して即興的な歌才を発揮していたようであるが、この場合も、良暹の方が長家の歌を模したのであろう。しかしながら、長家の歌があくまでも叙景歌であるのに対し、良暹の歌り、内裏や権門などにおける晴の場とはおおよそ没交渉なのであっ

Osaka Shoin Women's University Repository

て、『看記』長久二年三月二十八日の条に、殺人犯として捕縛され
た中原師範という人物が見えるが、「年廿九云々、故右京亮致行第

しにしに古詩を盗用して良覚的な歌を発表していたとあるが、この場合も、良運の方が長家の歌を模したのであろう。しかし

ながら、長家の歌があくまでも叙景歌であるのに対し、良運の歌は、たとえば源信の「払二妄想雲霧一、顕二心性月輪一」（『観心略要集』）といった詞句を引くまでもなく、雲が迷妄を表わし、月が阿弥陀仏の具象化であるのが明瞭である。また、「念二極楽之尊一一夜、山月正円」（『和漢朗詠集』巻下、紀斉名）とも無関係ではあるまい。

ところで、良運は、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』によると①「長暦二年九月十三日権大納言師房歌合」、②「長久二年二月十二日弘徽殿女御生子歌合」、③「鷹司殿倫子百和香歌合」、④「永承六年五月五日内裏根合」、⑤「通宗（通家？）歌合」、⑥「俊綱歌合」に出詠している。このうち、⑥は、出典となっている『彰考館本古今集聞書』が、『袋草紙』上巻所伝の歌会を歌合と誤解したものである。また、①④が、それぞれ女房と源信房のための代作であることは明らかであり、②も、『今鏡』巻四「小野の御幸」によれば代作である。さらに③は、萩谷氏が、「恐らく歌合としては勝負の判もなく、百和香もしくは百花を進めた後、侍臣女房等が左右に分かれて、百和香（若しくは百花）にゆかりの花を題として、当座に和歌を詠作し、歌合の形にこれを番えて朗読した程度の座興に過ぎなかったものと思われる」[9]と指摘されたごとく、歌合としては変則的なものであろう。ということは、良運が直接に参加した本格的歌合は、主催者も成立年月も曖昧な⑤のみとなるが、良運は、晴儀の歌合とはほとんど無縁であり、代作者として、ようやくその名を留めているにすぎない。現存している作品で見る限り、女房との贈答歌もなく、源経頼を除いて上級貴族との交友を示す歌もない。つまり、内裏や権門などにおける晴の場とはおおよそ没交渉なのであって、良運の詠歌の主なる場は、橘俊綱の伏見亭歌会に代表されるような受領層貴族の邸における私的な歌会、あるいは、親昵な友人たちとの贈答にあったと見られるのである。

しかし、良運が、晴の世界に対する関心をまったく持っていなかったわけではない。四条宮寛子が東三条殿で催した御遊の時、彼が「もみぢ葉のこがれてみゆるみ船かな」と連歌の前句を詠み、それに付けうる者が誰ひとりいなかったという逸話は、はなはだ有名であるが、『俊頼髄脳』によると、その折、殿上人が「良運がさぶらふか」と問いかけたところ、良運は「めもなくゑみて、ひらがりて」いたという。この一節から、良運の得意な感情がよくうかがえるが、それは、殿上人と旧知であったせいばかりではない。彼は、殿上人に呼びかけられた時点で、歌の詠進を命ぜられるのを予測したはずであり、詠歌によって殿上人を感嘆させようという、彼なりの貴族社会への野心が満足されるゆえの、満面の笑みであったと思われる。

二

良運は、前述のごとく、「長久二年二月十二日弘徽殿女御生子歌合」に代作者として参加し、二番左と七番左に出詠しているが、七番左は

みがくれてすだく蛙（かはづ）の諸声にさわぎぞわたる井手の浮草

という歌で、判者藤原義忠は、勝と判定している。詞の面での新し

Osaka Shoin Women's University Repository

さを良暹に認めておられる上野理氏は、この歌では、「すだく蛙」「諸声」「さわぎぞわたる」が従来の歌語に例を見ないとされた。[10] しかし、「さわぎぞわたる」はともかく、蛙が「すだく」と表現するのは、良暹の作以前にも、

かはづなく小田の苗代すぎしより今朝は声こそすだきますなれ
（西本願寺本『能宣集』）

けふ聞けば井手のかはづもすだくなり苗代水をたれまかすらん
（『重之集』）

わが宿の板井の水やぬるからん底のかはづも声すだくなり
（『曽禰好忠集』）

苗代にかはづの声もすだかぬにいつをほどにて帰るかりがね
（『大斎院前の御集』）

声たてて沢のかはづやすだくらむ八重山吹の今さかりなる
（『相模集』）

などと例が多く、「諸声」も、

雲路をもしらぬわれさへ諸声にけふばかりとぞなき帰りぬる
（『後撰集』巻十八、読人不知）

水口にわれやみゆらむ蛙さへ水の下にて諸声になく
（『伊勢物語』）

なけやなけわが諸声に呼子鳥よばばこたへて帰りくばかり
（『和泉式部続集』）

といった先行例をあげることができる。この歌の主眼は、そういう詞の方面ではなく、尾上柴舟氏のいわれた、蛙の鳴き声の喧噪を正面から捉えている点[11]と、結句に「井手の浮草」を置いたところに見出すべきであろう。いうまでもなく、井手は、蛙と山吹の名所として知られている。したがって、歌合の参会者たちは、「みがくれてすだく蛙の諸声にさわぎぞわたる井手の……」と披講されてきて、次は当然に山吹へ続くだろうと予測したはずである。その予測を、「浮草」という語（もちろん、この語自体は珍しいものではない）で見事にはぐらかしているのである。そのような、いわば誹諧歌的な人の意表に出るおかしみが、この歌には仕組まれている。

同じ趣向が、『後拾遺集』巻十一所収の次の一首にも見られる。

文にかかんによかるべき歌とて、俊綱朝臣人々によませ侍りけるによめる

あさね髪みだれて恋ぞしどろなるあふよしもがな元結にせん

「あさね髪……」といえば、当時、だれしもが「あさね髪われはけづらじうつくしき君が手枕ふれてしものを」（『万葉集』巻十一、『拾遺集』巻十四に第四句が「人が手枕」となって見えるほか、『古今六帖』巻五・『柿本集』にも入集）を想起したであろう。『万葉集』の歌は、女性の純真な恋愛感情を詠んだ可憐な一首であるが、良暹は、結句に「元結にせん」という意外な句を置くことにより、それを滑稽化してしまっているのである。

良暹には、これら以外にも諧謔を含んだ歌がいくつか存するが、次に掲げてみよう。

八月、駒むかへをよめる

あふさかの関の杉むら引くほどはをぶちにみゆる望月の駒

（『後拾遺集』巻四）

ている。良暹は、神聖な庭火を暖房用の火とみなしているのであ

Osaka Shoin Women's University Repository

（神楽を）

榊葉にゆふしでかけてふる袖の庭火はたけとさえわたるかな

（『後拾遺集』巻四）

わたのべや大江の岸に水こえてこや野のきはに舟つなぐなり

（『万代集』巻七）

（『夫木抄』巻二十三）

一首目の第四句の「をぶち」に関して、小斑とする説と陸奥国の地名の尾駮とする説とが、すでに平安末期から併存している。[12] 私自身は、望月に信濃の地名と満月の意とが懸けられているように、両者を懸けていると理解しているが、いずれにしても、

陸奥のをぶちの駒も野がふには荒れこそまされなつくものかは

（『後撰集』巻十八、読人不知）

綱たえてひき離れにし陸奥のをぶちの駒をよそに見るかな

（『後拾遺集』巻十六・『相模集』）

という例歌や、『かげろふ日記』で、道綱の母の「なつくべき人もはなてば陸奥のむまやかぎりにあらんとすらん」という歌に対し、兼家が「われが名ををぶちの駒のあればこそなつくにつかぬ身ともしられめ」と返歌していることなどから見ても、陸奥と「をぶち」とが密接な関連を有するのは変らない。とすれば、この歌は、信濃の望月の駒であるのに、関の杉群の陰によって斑ができ、まるで陸奥産の駒のようだという意となり、まったくの諧謔歌である。

二首目も、『拾遺集』巻十の神楽歌「榊葉にゆふしでかけてたが世にか神の御前に祝ひそめけん」などとは、かなり異質の趣を有している。良暹は、神聖な庭火を暖房用の火とみなしているのである。

三首目は、摂津国の大洪水の歌で、第四句の「こや」には、むろん「此や」と地名「昆陽」とが懸けられているわけだが、諧謔をねらいとする歌であるのは瞭然としている。良暹には、別に、「わたのべや大江の岸にやどりして雲ゐに見ゆる生駒山かな」（『後拾遺集』巻九）という歌があり、その詞書に「津の国に下りて侍りけるに、旅の宿にて遠く望む心をよみ侍りける」とあるが、「こや野」の歌も、おそらく、摂津国大江における歌会での詠であろう。

良暹の作品の一面を右のように考えてくると、彼が俊綱邸で「宿ちかくしばしなが鳴け郭公けふのあやめの根にもくらべむ」と詠み、懐円から嘲弄されたという『袋草紙』上巻の所伝も、良暹の無知を立証しているとばかりは決められない。彼は、「なが鳴く」が「汝が鳴く」の意であることなど十分に承知の上で、あえて「長鳴く」の意に曲解しているとも推察されるからである。それにしても、この「宿ちかく」の歌も、

足引のやまほととぎすなが鳴けば家なる妹し常に思ほゆ

（『万葉集』巻八）

やまとには鳴きてかくらむ郭公なが鳴くごとになき人思ほゆ

（『万葉集』巻十・『赤人集』）

時鳥なが鳴く里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから

（『古今集』巻三、読人不知・『猿丸集』『業平集』）

などという古歌と並べれば、時鳥の鳴き声とあやめの根との長さを

八月、駒むかへをよめる

あふさかの関の杉むら引くほどはをぶちにみゆる望月の駒

といった先行例をあげることができる。この歌の主眼は、そういう詞の方面ではなく、尾上柴舟氏のいわれた、蛙の鳴き声の喧噪を正

Osaka Shoin Women's University Repository

比較しようという発想自体が、およそ誹諧歌的に思える。

ところで、良暹は、以上のような諧謔歌を詠作する一方、和歌六人党の歌人たちや能因などと同様に、山里の静寂美を愛好した歌人でもあった。たとえば、

あれたる宿に月のもりて侍りけるをよめる

板間より月のもるをも見つるかな宿はあらして住むべかりけり

（『詞花集』巻九・『後葉集』巻十六）

という一首は、たしかに良暹の志向するところを如実に表わしている。板間よりもる月光は、従来さびしいもの、悲しいものと理解されてきたが、良暹は、美的なものとして積極的に肯定し、むしろ理想的生活を、そこに発見しているのである。それは、良暹が直接に典拠としたと察せられる、「君まさであれたる宿の板間より月のもるにも袖はぬれけり」（『古今六帖』巻四・『和漢朗詠集』巻下）と比較しても明らかである。とはいうものの、このような志向を、良暹の独自性と判断するのは妥当でない。なぜならば、荒屋をもってくる月光に美的情趣を感得するのは、この頃、相当に一般的であったとも思えるからである。「応和二年七月五日庚申河原院歌合」の歌題に、早く「月影漏屋」があったが、『枕草子』でも、「あはれなるもの」の中に「あれたる宿の板間よりもりくる月影」をあげているし、板間からの月光ではないが、「夜ふけて、月の窓よりもりたりしに、人のふしたりしどもが衣の上に白うてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおぼえしか」とも述べている。さらに『源氏物語』「夕顔」にも、「八月十五日夜、くまもなき月影、ひま多かる板屋のこりなくもりきて、見ならひたまはぬ住まひのさまもめづらしきに」という描写がある。

暮落葉といふことをよめりける

神無月もみぢ散りかふ夕ぐれはあらしの山の音ぞさびしき

（『秋風集』巻七）

これも、同じく秋の寂寥を詠み込んだ良暹の歌である。「あらしの山」は、地名であるとともに嵐の吹く山でもあるが、その風の音が寂しいというのである。この場合も、寂しいゆえにいいのだと主張しているような響きが感じられる。もっとも、この歌が、藤原高光の「神無月かぜに紅葉の散るときはそこはかとなく物ぞ悲しき」（『高光集』、のちに『新古今集』巻六に入集）から多くを負っていることは否定できない。しかし、こういった傾向の作品の中から、「さびしさに宿をたち出てながむればいづくも同じ秋の夕ぐれ」のような秀歌が生まれるのであり、いちおうは留意すべきであろう。

三

良暹が叡山の別所であった大原に草庵を結んだ時期が、永承年間以降であるのは、次の歌によりほぼ確実であろう。

大原に住みはじめけるころ、俊綱の朝臣のもとへいひつかはしける

大原やまだすみがまもならはねばわが宿のみぞ煙たえたる

（『詞花集』巻十）

この歌は、中世の説話集などを通し、物乞いのために橘俊綱のも

Osaka Shoin Women's University Repository

物語』「夕顔」にも、「八月十五日夜、くまもなき月影、ひま多かるこの歌は、中世の説話集などを通し、物乞いのために橘俊綱のもとへ贈った作としてよく知られているが、『後葉集』巻十七所収の同歌の詞書に「大原に住み侍りける頃、としつなの朝臣のもとより、炭はやきならひたりやとまうしたる返りごとに」とあり、物乞いの歌ではなかったかもしれない。洛北大原において、炭焼が盛んに営まれていたのは、『小右記』の「大原山多為主殿寮領板松所出云々、又公私為炭木之便」(寛仁二年十一月一日の条)という記事によっても、事実であるのが明らかである。橘俊綱は、長元々年の出生であるので、永承元年でようやく十九歳となるが、この歌がそれ以前に詠まれたとは考えにくい。物乞いの歌であるならば、なおさらである。

大原に住み始めた良暹のもとには、素意法師からも歌が寄せられた。

良暹法師、大原にこもりゐぬと聞きてつかはしける　素意法師

み草ゐしおぼろの清水そこ澄みて心に月のかげはうかぶや

返し　良暹法師

ほどへてや月もうかばん大原やおぼろの清水すむ名ばかりに

(『後拾遺集』巻十七)

素意(藤原重経)の出家は、康平七年のことのようなので(『粉河寺縁起』)、おそらくは未だ在俗時代であったろう。両首に見える「月」は、むろん仏を表徴しているが、『観心略要集』の一節、「観法之功用不レ期而見レ仏、如二霜降水澄月泛一而已、只是心水止レ濁、可レ待二満月来迎一」とも関係があろう。「おぼろの清水」は、大原の清水の訛ともいうが(『大日本地名辞書』)、片桐洋一氏のいわれるごとく[13]、大原に実在していたと考えるのが穏当である。同氏監修の『平安和歌歌枕地名索引』によると、この贈答以前に朧の清水を詠んだ例は見られない。ただし、『新撰朗詠集』巻下は、大中臣能宣の作として「世にすまばまたも見にこむ大原やおぼろの清水おもがはりすな」を収載しているが、勅撰集はもちろん『能宣集』の諸本にも入集せず、作者名に若干の疑念が残る。

現在の大原町草生、京都バス「大原」停留所から寂光院へ向かう道の傍に、朧の清水を称する泉が存している。少なくとも近世初期にまで遡り、ほぼ現位置において確認可能であるが、良暹時代においても同一であったか否かは不明である。ただ、良暹の草庵の位置とも関連するが、顕昭は、「但考二能因歌枕一云、おぼろの清水は山城国大原野に有りと云へり。或人の申し侍りしは、江文のひんがしにあり、良暹が大原の山庄の辺云々」(『袖中抄』巻十)と述べ、「(良暹の)大原房ハ江文ノ東北ニアタル処ナリ。南ニアル山ヲバヲバステヤマトナヅケテ常ニ月ヲナガメケリ」(『後拾遺抄註』)とも記している。つまり、朧の清水は良暹の房の近辺にあり、それは、江文の東北(東?)にあたる地であるというのである。顕昭の時代に良暹の草庵趾が残存していたのは、『山家集』などによって知られ、これらの記録はそれなりに信頼できる。西山の大原野にも朧の清水が存在したらしいが、江文は、洛北大原にあって、江文神社・江文峠の名を今に残しており、平安末期には江文寺が成立していた。そして、現在の朧の清水は、まさに江文の東北に該当しているのであ

Osaka Shoin Women's University Repository

る。

近世の地誌類は良暹の草庵の場所をおおむね未詳としているが、『雍州府志』第一は、「良暹坊　在二大原勝林寺中一、良暹以下所二自詠一之歌上書二障子一、至二近世一歌未レ消、今與レ坊絶其跡存耳」と伝えている。勝林寺が勝林院とすると、朧の清水と勝林院とは、直線距離で約一キロ隔たっており、勝林院内に良暹の庵があったのならば、現在の朧の清水は当初のものでないことになろう。勝林院は、大原少将入道と号された源時叙（寂源）が開創した寺で、良暹の生存期には、すでに存在しており、ややくだった承暦年間から元永年間にかけて、台密谷流の人々がしきりに来往し活躍していたという。[14] またその位置は、江文の東北という顕昭の言ともけっして齟齬しない。しかし、かりに勝林院説が事実ならば、顕昭は、「江文ノ東北」などという曖昧な表現を避け、「勝林院ニアリ」とでも記したのではなかろうか。かくて、多少の疑問を感じつつも、ひとまず現在の朧の清水の附近に良暹の草庵があったと推定しておきたい。

さて、『後拾遺集』巻四に次の良暹の歌が入集している。

題しらず

さびしさに宿をたち出てながむればいづくも同じ秋の夕ぐれ

『百人一首』に撰入されて、はなはだ人口に膾炙しているが、この歌に、中世和歌へと続く新風を看取する見解が有力である。香川景樹が「こは、大原などに住まれし時の詠なるべし」（『百首異見』）と述べて以来、大原での詠歌とする『百人一首』の注釈書も多い。[15] 寂しい秋の夕暮の光景が、いかにも大原らしく読者に感じられることを、ひとつの根拠としているようである。この頃の和歌を、作者の体験に強く引きつけて解釈するのは、少々危険であるが、私は、

良暹法師のもとにつかはしける

思ひやる心さへこそさびしけれ大原山の秋の夕ぐれ

（『後拾遺集』巻十七）

という藤原国房の作を根拠にあげておきたいと思う。寂しさを思いやるという発想や結句「秋の夕ぐれ」の共通性など、良暹に答えた歌のようである。『後拾遺集』では巻を隔てて両者が撰入されているが、元来は一組の贈答歌であったのではなかろうか。たとえ贈答でなかったとしても、国房が良暹の歌を強く意識しているのは確実で、良暹が大原の払いがたい寂寥感を詠み、国房は、それに深く共感しているのである。なお、藤原国房は、『勅撰作者部類』に「五位石見守、玄蕃頭藤原範光男、至永保四年七月」とあるが、『水左記』承保四年八月二十二日の条に「石見守国房依病出家云々」とあり、承保四年八月からさほど遠くない時期に没したと推察される。俊綱の伏見亭歌会のメンバーのひとりでもあり（『続詞花集』巻十六）、俊綱の依頼で屏風歌を詠進したこともあった（『万代集』巻二）。そのような縁で良暹とも親しく交流していたらしい。この国房には、「さびしさをいかにせよとて岡べなる楢の葉しだり雪のふるらん」（『新古今集』巻六）という作品もあるが、『新古今集聞書』に「さびしさはおもしろき心にや」と注しているごとく、山里の寂寥への指向がうかがわれ良暹の歌風に近いものが感じられる。

「さびしさに」の歌を大原での詠とするのに誤りがなければ、

Osaka Shoin Women's University Repository

後一条院うせさせ給ひて、世のはかなくおもほえければ、法師になりて横川にこもりゐて侍りける比、上東門院よりとはせ給ひたりければ　　前中納言顕基

世をすてて宿をいでにし身なれどもなほこひしきは昔なりけり

御返し　　上東門院

ときのまも恋ひしきことの慰まば世はふたたびも背かざらまし

（『後拾遺集』巻十七）

という贈答歌との関連も想定されよう。出家を「家を出づ」と表現した例は多いが、「宿を出づ」と詠む例は稀である。源顕基は、長元八年、後一条院の崩御とともに大原で出家、その後は横川に隠栖し、永承二年九月三日に四十八歳で入滅した人物である。永承二年といえば、良暹の大原籠居の時期とも近い。もしも、良暹が顕基の歌を念頭に置いていたならば、彼の場合「宿をたち出て」を出家とは解しがたいが、大原移住の暗示ともとれなくはない。

良暹には、右に引用した三首のほかに、大原での詠歌と察せられる作品が二首ほどある。

山里に住みけるころ、雪ふりける日人につかはしける

よそにても見ゆらむものを山里の雪はいかにとおとづれよかし

（『万代集』巻十六）

山里のかひもあるかな郭公ことしも待たで初音ききつる

（『袋草紙』上巻）

一首目の「山里」が大原であるとは、むろん断定できないが、良暹が大原以外の山里に籠居したことを語る資料は、他になさそうである。『万代集』には別に、「朝まだき烟たなびく小野山の槙の炭がま夜半にたきけり」（巻六）という歌が収められている。京の歌会での詠の可能性もあるが、「小野山」が大原に程近い小野[16]だとすれば、大原に関わる歌のひとつに数えられるかもしれない。もっとも、『後拾遺抄註』に「小野ト云フ所ハ山城ニ三所アリ。丹波ノ方ニ長坂ヲコエテユク、其ハ炭ヤク所也。ヒエノ山ノ西坂下ニアリ。醍醐ノ傍ニアリ」とあるのに従えば、洛北の地ではないことになる。しかし、『堀河院百首』には、「大原や小野の炭がま雪ふりて心ぼそげにたつけむりかな」（源師頼）や「大原や小野の炭がま雪ふれど絶えぬ煙ぞしるべなりける」（藤原仲実）という歌もある。あるいは、この「大原」は、西山大原野の方であろうか。顕昭のいう「長坂」が今の老ノ坂だとすると、大原野に近い。

二首目は、良暹の大原の房の障子に書きつけてあったと伝承される歌である。下の句が藤原定頼の「郭公おもひもかけぬ春なれば今年ぞ待たで初音ききつる」（『後拾遺集』巻二・『定頼集』）と、ひとつの助詞を除いて同一であるため、清輔が問題にしている。良暹が、定頼を真似たと見てよいだろう。しかも、この歌は、道命法師の「山里のかひこそなけれ郭公みやこの人もかくや待つらん」（『詞花集』巻二、『道命阿闍梨集』には見えない）、あるいは、藤原経衡が右京大夫道雅邸で詠んだ、「山ちかきかひこそなけれ郭公みやこなりともかくぞ待たまし」（『経衡集』）を裏返しにした作で、いわば一種のパロディーである。こんなところにも、良暹の持つ諧謔性が色こ

寂しい秋の夕暮の光景が、いかにも大原らしく読者に感じられる「さびしさに」の歌を大原での詠とするのに誤りがなければ、

Osaka Shoin Women's University Repository

く現われている。

四

『山家集』下巻および『聞書残集』によれば、尾張の尼上を大原に尋ねた西行は、寂然たちと良暹の旧房に赴き、

大原やまだ炭がまもならはずといひけむ人を今あらせばや

という一首を、旧房の扉戸に書き残している。西行が良暹を深く思慕していた様子がうかがわれるが、彼は、遁世の歌人良暹に、みずからの理想を投影させていたのであろう。実際、この良暹を、安法や能因などとともに数奇の遁世者の先駆と捉え、西行へと繋がる系譜を設定するのも不可能ではない。[17] しかしながら、尾崎雅嘉が「良暹法師が我が宿のみぞ烟絶えぬると詠みて送りしは、栄辱を離れたる大原や朧の清水のほとりに、風月をもてあそび清貧を楽しみて栖まはれし折柄なり。その幽棲思ひやるべし」(『百人一首一夕話』)と記したように、良暹に草庵生活者ゆえの反俗性を強調するのは、かならずしも正当な評価とは称しがたい。良暹は、一方では、内裏や権門における晴の場への世俗的な野心を抱懐しつつも、ひとりの数奇者の僧侶として生涯をおくったのである。その歌風は、山里の寂しさへの志向を見せると同時に、諧謔歌に目立った特徴を示しているが、それはそのまま、藤原俊成によって「ひとへにをかしき風体」と評された『後拾遺集』の歌風へ直結するものであろう。

注

(1)「良暹とその周辺」(『共立女子大学短期大学部紀要』5、昭和36・12)

(2)「後冷泉朝の歌壇」(『講座日本文学4・中古篇Ⅱ』昭43・12)

(3)「橘俊綱考」(『平安文学研究』25、昭35・11)「俊綱の周辺」(『共立女子大学短期大学部紀要』4、昭35・12)

(4)源経信『難後拾遺』ただし、斎藤氏が注1の論で指摘されたように、良勢法師の間違いとも考えられる。

(5)注1の論に同じ。

(6)山之内恵子氏・増淵勝一氏「後拾遺和歌集作者ノート」(『立正女子大学短期大学部研究紀要』13、昭41・12)参照。

(7)山之内恵子氏「後拾遺和歌集〈詠み人知らず〉歌考」(『平安朝文学研究』21、昭46・8)参照。

(8)間中冨士子氏『国文学に摂取された仏教』(昭47・12)一二七―一二八ページ、高木豊氏『平安時代法華仏教史研究』(昭48・6)三三九ページなど参照。

(9)『平安朝歌合大成・三』(昭34・4)八八一ページ。

(10)『後拾遺集前後』(昭51・4)一二〇ページ。

(11)『平安朝名歌評釈』(昭10・2)二〇〇ページ。

(12)『奥義抄』に良暹の歌を引いて「をぶちとは小ぶちと云ふなり。杉まの月の影のうつりたるが、ちひさく斑なるやうにみゆるなり」とあるが、『後撰集』巻十八の歌については、「是はぶちにあらず。陸奥にをぶちと云ふ所よりいでくる馬をいふ也」とある。『和歌色葉』『色葉和難集』『和歌無底抄』などに種々の論が見える。

(13)「古典和歌鑑賞辞典3・大原かげろふ他」(『短歌』昭52・3)

Osaka Shoin Women's University Repository

(14)井上光貞氏『新訂・日本浄土教成立史の研究』(昭50・2)二〇四—二〇五ページ。同氏『日本古代国家と仏教』(日本歴史叢書、昭46・1)二四六ページ。

(15)井上宗雄氏『明解シリーズ(1)・百人一首』(昭42・12)、白洲正子氏『私の百人一首』(新潮選書、昭51・12)など。『一〇〇人で鑑賞する百人一首』(昭48・12)で、中田祝夫氏が「作者は……大原の山里——有名な寂光院の辺り——の山寺(草庵)に住んでいた。この歌は、だから大原の辺りの山里の秋の淋しい景色である」とされたのは、いささか強引な論理である。

(16)洛北小野は、奥村恒哉氏の『歌枕』(平凡社選書、昭52・4)によれば、現在の左京区高野を中心とする地域であるという。

(17)目崎徳衛氏『出家遁世』(中公新書、昭51・9)四二—四三ページ参照。

(本学講師)

受贈図書(122ページよりつづく)

東海学園国語国文9・10号
中世文学論叢1号　東京学芸大学
国文学・漢文学論叢21号　東京教育大学
苫小牧工業高等専門学校紀要11号
国文学論考12号　都留文科大学
国文鶴見11号　鶴見女子大学
鶴見大紀要13号
文学論藻50号　東洋大学
短期大学紀要7号　東洋大学短期大学
鶴見大学紀要13号
学術研究24号　早稲田大学
国文学研究58〜60号　早稲田大学
山形女子短期大学紀要8号

葉』『色葉和難集』『和歌無底抄』などに種々の論が見える。

(13)「古典和歌鑑賞辞典3・大原かげろふ他」(『短歌』昭52・3)